JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY アート・ドキュメンテーション学会

アート・ドキュメンテーション学会 2022 年度 年次大会 予稿集 2022 年 6 月 11 日(土)・12 日(日) 慶應義塾大学三田キャンパス及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 2022年度 年次大会プログラム/目次

2022年6月11日(土) 13:00 - 18:00

13:00- 開会挨拶 赤間亮(アート・ドキュメンテーション学会 会長)

松田隆美(慶應義塾ミュージアム・コモンズ 機構長)

【シンポジウム「コレクションとコモンズ:コレクションをめぐる動向」】 13:15 - 16:00

p.5

13:15- [講演] 渡部葉子(慶應義塾ミュージアム・コモンズ 副機構長

/慶應義塾大学アート・センター教授・キュレーター)

コレクションとコモンズ:

KeMCo の空き地的コレクションビルディング

13:40- [講演] 川口雅子(独立行政法人国立美術館本部

アート・コミュニケーションセンター (仮称) 設置準備室)

なぜロダン《考える人》が東京・上野にあるのか ——あらためて問うコレクション来歴研究の意味

14:10- [講演] 三島美佐子(九州大学 総合研究博物館 教授)

使いながら保存し次世代につなげる「在野保存」

-資料の保存・継承の新たな試み-

14:40- [講演] 佐藤知久(京都市立芸術大学芸術資源研究センター 教授)

分散型地域・芸術資源アーカイブの可能性について

15:10-15:20 休憩

15:20-16:00 全体討論・質疑応答

モデレーター:本間友(慶應義塾ミュージアム・コモンズ

/慶應義塾大学アート・センター)

【慶應義塾ミュージアム・コモンズ 見学会】 16:00 -18:00

- ・展覧会「書を極める:鑑定文化と古筆家の人々」
- ・デジタル・ファブリケーションラボ 「KeMCo StudI/O」

2022年6月12日(日) 10:00 - 17:50

【総会】 10:00 -12:00 (会員限定)*オンライン

【野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞授賞式】 13:00 -13:30

p.7

【研究発表】 13:40-15:40 (発表25分 質疑5分)

13:40-14:10 [発表1] 藤岡洋(京都市立芸術大学芸術資源研究センター) p.9 史料になった記録映像の特徴と分析法について

14:10-14:40 [発表2] 原翔子(東京大学大学院学際情報学府) p.11 最適なキュレーションの探し方

14:40-15:10 [発表3] 橋本久美子 p.13 学校史料のアーカイブ化に見る課題と展望

――旧制東京音楽学校史料の可視化と共有化を事例に

15:10-15:40 [発表4] 飛田ちづる(元文化庁国立近現代建築資料館) p.15 小規模建築資料の整理と研究利用への試み

――渡辺仁、岸田日出刀資料を事例として

【ポスター発表セッション(ライトニングトーク)】 15:40 -16:00

[発表1] 阿児雄之(東京国立博物館) p.17 学習指導要領 LOD の公開と活用の検討

[発表2] 本間友(慶應義塾ミュージアム・コモンズ) p.17 修復ドキュメンテーション(Conservation Documentation)の共有化 近年の議論とオープンサイエンスとの関わり

[発表3] 寺師太郎(凸版印刷)、式洋子(印刷博物館) p.18 活版印刷文化の伝承-マインツ・インパルスへの協力

[発表4] 森山緑(慶應義塾大学アート・センター)、 石本華江(慶應義塾大学アート・センター) p.18

Blast From the Past:

「アート・アーカイヴ資料展」ハブとしてのアーカイヴを視覚化する

	[発表6] 学会アーカイブ SIG(アート・ドキュメンテーション学会) JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG) の治	p.19 舌動
【動向紹介】 16	:20 -17:10	
16:20-16:45	[動向紹介1] 前川充(オムニアート合同会社) デジタルアーカイブにおける NFT とブロックチェーンの意味	p.21
16:45-17:10	[動向紹介2] 栗原祐司(京都国立博物館) 博物館法改正について	p.21
【活動紹介】 17:	10 -17:40	
	[活動紹介1] 矢口琴衣(長野県立美術館) 長野県立美術館アートライブラリーへようこそ	p.22
	[活動紹介2] 富澤洋子(ポーラ文化研究所/ポーラ化粧文化情報センター) 化粧文化を身近なものに 〜ポーラ文化研究所のオンラインサービス〜) p.23
	[活動紹介3] 鴨木年泰(東京富士美術館)・森照寿(株式会社 CREiST) 「デジタルアーカイブを日常にする」ジャパンサーチ連携の試み 一電子棚札を使ったデジタルキャプション実証実験	p.23
	[活動紹介4] 松山ひとみ(大阪中之島美術館)*オンライン発表 アーカイブズ情報室開室のお知らせ	p.24
	[活動紹介5] 笹木一義(国立アイヌ民族博物館)*オンライン発表 カンピソシ ヌカラ トゥンプ[国立アイヌ民族博物館 ライブラリ] の活動紹介	p.24
17:40-	閉会の挨拶 本間友(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)	
	究集会 発表者募集 ゲーション研究』第 31 号 原稿募集	p.25 p.26
アート・ドキュメンジ	テーション学会 刊行物ご案内 テーション学会 入会のご案内	p.27 p.28

[発表5] デジタルアーカイブサロン(アート・ドキュメンテーション学会)

デジタルアーカイブサロン 12 年の歴史

p.19

シンポジウム 「コレクションとコモンズ:コレクションをめぐる動向」6月11日(土) 13:15-16:00

近年の社会構造の変化や情報化の進展は、ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴ等の文化機関におけるコレクションの管理や活用のありかたにも影響を与えている。2021年度のJADS年次大会では、「美術館コレクション検索」というテーマのもと、情報プラットフォーム上でのコレクションの可視化と共有化についてディスカッションを行った。今回のシンポジウムでは、昨年度の議論に接続しながら、実体物としてのコレクションに焦点をあて、その共有化をめぐる動向と課題について考えたい。

たとえば、コレクションを一カ所に集めるのではなく、いまある場所での活動や人との結びつきを保ったまま、共有と活用を進めるためにはどうすればよいのか。あるいは、所有者/管理者に限らない、様々な人々が、コレクションの研究や教育、保存や活用に多様なレベルで関わる環境をどのように整えてゆけばよいのか。このような問いを出発点として、来歴の記述、コレクションのインテグレティ、コミュニティ・アーカイヴ、ミュージアムと地域の協働といった切り口から、様々な場所における実践事例を紹介し、ディスカッションを行うことによって、これからの社会におけるコレクションの共有化について考察する端緒としたい。

登壇者プロフィール(登壇順、敬称略)

渡部 葉子(わたなべ ようこ)

ミュージアム・コモンズ副機構長/慶應義塾大学アート・センター教授・キュレーター

近現代美術史を専門とし、東京都美術館、東京都現代美術館において学芸員として活動。2006年より慶應義塾大学アート・センターにて、展覧会や各種催事を企画実施する(現代美術のシリーズ展など)とともにアート・センターが所管するアーカイヴの活動にも関わる。「東京ビエンナーレ'70」研究プロジェクトや慶應義塾の建築プロジェクトなど、アーカイヴ活動と展示やワークショップを結びつけた活動を実践している。近年はOBL(オブジェクト・ベースト・ラーニング)に関心を寄せ、KeMCoにおいて展開しようと試みている。

川口 雅子(かわぐち まさこ)

独立行政法人国立美術館本部学芸担当課長/

アート・コミュニケーションセンター(仮称)設置準備室情報資料グループリーダー

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期退学。(財)ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、国立西洋美術館を経て 2022 年より現職。共編著に『松方コレクション 西洋美術全作品』全 2 巻(国立西洋美術館、2018-2019)、論文に「カタログ・レゾネ編纂と美術作品のドキュメンテーション」(『アート・ドキュメンテーション研究』、2020)等。文化庁アートプラットフォーム事業日本現代アート委員会委員、(一財) 奈良美智財団ウェブサイト「YOSHITOMO NARA The Works」アドバイザー、内閣府魅力ある新国立公文書館の展示・運営の在り方に関する検討会委員。第 15 回西洋美術振興財団賞・学術賞受賞(2020年)。

三島 美佐子(みしま みさこ)

九州大学 総合研究博物館 教授

九州大学総合研究博物館・教授、博士(理学)。元々の専門は植物系統学で、現在は大学博物館のあり方や運用に関する実践研究に従事。大学キャンパス移転を機に、学術標本資料の保全・活用・継承に関する課題に直面し、現在も試行錯誤中。

佐藤 知久(さとう ともひさ)

京都市立芸術大学芸術資源研究センター 教授

1967年生まれ。京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授・専任研究員。専門:文化人類学、芸術資源研究。主な著作に、『コミュニティ・アーカイブをつくろう!…せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」奮闘記』(甲斐賢治・北野央と共著、2018年、晶文社)、『フィールドワーク 2.0…現代世界をフィールドワーク』(風響社、2013年)、主な論文に「映像のオラリティ、映像のリテラシー・オーラル・ヒストリーと映像メディア」(『日本オーラル・ヒストリー研究』16:11-25、2020年)など。芸術資源研究センター紀要『COMPOST』編集委員。

第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞授賞式

2022年6月12日

第16回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞選考委員会

標記の賞につき、会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考の結果、2022年度は学会賞該当なし、推進賞として下記 1件の授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第16回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞選考委員会 高橋晴子(委員長)、赤間亮、黒田結花、田良島哲、本間友、前田富士男

◆第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

「當の概要

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

受賞

該当なし

◆第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

「當の概要

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞

山根貞男 氏

『日本映画作品大事典』(三省堂, 2021)の編集および長年にわたる映画に関わるドキュメンテーション活動に対して

映画評論家であり、著述家である山根氏は、22年間という長い年月をかけて『日本映画作品大事典』を編集され、このたび刊行が実現した。本書は、1908年から2018年までを対象として、映画監督約1,300名、作品数約19,500本を収録する1,072ページに及ぶ大著である。戦前、戦後の日本映画の全盛期に制作された劇映画を中心に、100年の歴史を有する日本映画の作品データが一望できる。公開年、制作会社、出演者等の基本データに加え、約100字から400字の丁寧な内容解説を含む。さらには、フィルムサイズ、撮影者、スタッフ等の情報も掲載されており、各作品の詳細な事実を知ることができる。監督名を見出しとし、各人のフィルモグラフィとなる作品を公開順に配列する本書は、監督の人名事典としての役割も果たしている。巻末には、全作品索引とシリーズ索引を付して、作品を縦横に関連づけているところも評価できる点である。

授賞理由

本書は、映画が文化遺産として認識されながらもデータ整備が追いつかない現状において、キネマ旬報社や現・国立映画アーカイブをはじめとする映画データベースの蓄積データを活かし発展させた成果と言えよう。複数のデータやアーカイブ資料を調査し、流布されてきた情報の校訂に努め、作品情報、監督情報を統合して、あらたな基礎資料として提示したことの意義は大きい。

この公刊は、監督解説、作品解説にあたった約50名の執筆陣、そして三省堂の編集部担当者など、さまざまな協力者の貢献で実現している。しかし、本事業は、映画評論家として活躍する一方、フィルム収集家たちを取材し、日本映画の発掘にも携わった経験を有する山根氏の揺るがない編集方針と牽引力なくしては遂行されえなかった成果にほかならない。

山根氏の22年にわたる事典編集および、長年にわたる映画に関わるドキュメンテーション活動に対し、 第16回野上紘子アート・ドキュメンテーション学会推進賞を授与する。

※ 第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞の推薦募集は『アート・ドキュメンテーション通信』および学会のウェブサイト等にて告知いたします。 会員のみなさまには、ぜひ多くの推薦をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

【研究集会】

6月12日(日) 13:40-15:40 (発表25分 質疑5分)

発表者プロフィール

藤岡 洋(ふじおか ひろし)

京都市立芸術大学芸術資源研究センター非常勤研究員 立正大学文学部哲学科卒業。東京大学人文社会系研究科象 形文化研究拠点、国立西洋美術館、東京大学東洋文化研究 所などを経て、2022 年から現職。専門は人文情報学。主な 論考に「更新される「記録=記憶」に挑むデジタルアーカ イブは可能か」(秋田フィルムアンソロジー運営委員 会,2022)、「レイヤー的技巧と脳内編集:採掘される将来 の思考のため(東洋文化 100 号,2020)。

原 翔子(はらしょうこ)

東京大学大学院 学際情報学府社会情報学コース 博士課程

慶應義塾大学商学部卒業。現職東京大学大学院学際情報学 府修士課程修了(社会情報学)後、同博士課程在学中。2021 年より独立行政法人日本芸術文化振興会助成活動調査分 析研究員と東京財団政策研究所研究員を兼務。専門はネッ トワーク論。

橋本 久美子(はしもと くみこ)

2022 年 3 月まで東京藝術大学音楽学部大学史史料室非常 勤講師。認証アーキビスト。東京藝大音楽学部楽理科卒業、 修士課程修了。『東京芸術大学百年史』音楽篇 6 巻の編集。 近現代音楽史、大学史、アーカイブズ学。東京音楽学校の 学徒出陣を調査し戦没学生の作品のアーカイブ化を行う。 「東京藝術大学音楽学部におけるアーカイブズの現状と 課題に関する一考察:アーカイブズからより良い未来へ」 (『東京藝術大学音楽学部紀要』 2022 年 3 月)など。

飛田 ちづる (とびた ちづる)

元文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員 筑波大学卒業。外務省、JICA などを経て、2019年5月から2022年3月まで文化庁国立近現代建築資料館研究補佐 員として勤務した。専門は歴史地区保存など。博士論文の 題名は『文化遺産保存を目的とした日本の国際協力に関す る研究・ベトナムの歴史地区古都ホイアンを主な事例として・』。他に、歴史まちづくり法や未指定文化財、ベトナムの博物館などを研究中。

史料となった映像記録の特徴と分析法について

The characteristics and analytical methods of the moving images that turned into the historical record

藤岡 洋*

HUZIOKA, Hirosi

Resume:

動的映像(以下、映像)にとって、証言の有無は後の記録としての性格を大きく変える。本発表は、証言を得られる状況にある映像を「資料映像」、もはや証言を得られなくなった映像を「史料映像」とし、ショット単位分析を通じて、両者の違いを分析の際に集まる関心の違いに見出し、資料化における課題と展望を検討する。

1. はじめに

動的映像(以下、映像)を資料化しようとする際、記録に直接関わりをもつ者たちからの証言は、時に証左として、時に検証すべき課題になる。資料化にとって、映像は被写体のみで構成されているものではない。

一方、現存する映像には、もはや証言を得られないものも多い。だが、そのことによって映像の価値がなくなることは、もちろんない。

「その時代」「その場所」「被写体」などに関する知見が、映像の資料化に際し集積され検証 されるからである。

本発表は、直接的な証言を得られる状況にある映像を「資料映像」、もはや証言を得ることが叶わずに記録としてのみ存立する映像を「史料映像」とした上で、形成される資料の差異について考察したい。

2. 対象

発表者はここ数年、1)半世紀前の海外調査記録映像や、2)特殊な時勢下で撮影されたホームムービーの分析に取り組んでいる。前者は未編集ゆえに、後者はフィルムパッケージ等の調査から、それぞれ、時系列が保持されている。

1) <u>資料映像(西北タイ歴史文化調査団による</u> 調査行程記録映像)

1971-72 年の北部タイにおける山地民族学 術調査団の調査行程を記録したものであ る。半世紀前の映像だが、撮影者と一部の 調査団員ならびに現地通訳者が存命中で、 証言を得ることができる「資料映像」である。また幸運にも、映像にまつわる稀少文 書や実体資料、フィールドノートや大量の 写真などが大学博物館に保管されており、 元調査団員による研究書も刊行されている。この映像は、8mm フィルムカメラで記録され、計 139 本に収められた。分析の結果、全 1638 ショットで構成されていた。

2) 史料映像(通称、松井家ホームムービー) 愛媛出身の商人:松井清衛が米統治下だった戦前のフィリピンにわたり、マニラやセブ、ダバオやバギオといった主要都市で、一大商業チェーン店を展開した時期に記録された、いわゆるホームムービーである。2015年に清衛の末裔である松井啓伊子氏によって発見され、1929・1939年にわたって記録されたことが分かっている。この記録に直接関わった撮影者・被写体関係者には今や遭遇できないため、証言を得られない「史料映像」である。当時としては珍しく16mmカメラで記録されており、計51本のフィルムを分析した結果、全1995ショットで構成されていた。

3. 分析法

これらの映像に対し、発表者はこれまで、以下の手順で資料化を試みてきた。

*ふじおか ひろし(京都市立芸術大学 芸術資源研究センター)。

- a) まず、映像からショットを抽出し、ナンバリングする。この場合のショットは、録画の開始/停止によってフィルムに残った物理的・客観的痕跡である。
- b) とはいえ、ショットは数も多く、中にはコンマ数秒のものもある。そこで次に、映像内容の意味連関に着目し、いくつかのショットを一つにまとめ、ショットとは別の単位とみなす。これをシーンと呼び、ショット同様にナンバリングを行う。
- c) さらに、隣り合うシーンは、いつでも連続した意味をもつとは限らない。当時のフィルムの希少性から、映像は場所や日付をまたいで記録されることも多い。そのため、最後にシーンをシークエンスにまとめ、ナンバリングする。シークエンスは、映像を学術素材として利用する際により見通しをよくする利点もある。

ちなみに、上記分析の b) と c) はあくまで 分析者たちの解釈にすぎない。それゆえ、可能 な限り恣意的な解釈を避けるために、証言も含 むあらゆる他種資料を動員した。その結果、映 像が他種資料を引き寄せることになり、他種資 料も半ば自動的に時系列に並べられる事態を生 じせしめた。映像分析は映像による総合資料化 へ向かう可能性があることがわかってきた。

4. 資料と史料

ところが現在、同じ分析法を試みているにも 関わらず、資料映像と史料映像とでは形成され るインデックスが異なる様相を呈し始めてい る。

「資料映像」の場合、映写は記録時の出来事を生々しく呼び起こす。それゆえ、映像の欠落部分に目が行きやすい。例えば、「本当はあの時にここでは是是なことがあったはずなのだが」「これを撮ったのは自分ではなく誰々だったかもしれない」といった言説にそれは現れる。その証言は、フィールドノートや文献などの調査を通じて新事実の発見につながる場合もあれば、証言者の記憶が修正されていく場合もある。「資料映像」では、映像として記録され

なかったシーン・シーケンス「間」にも情報が 集まってくるケースがある。

「史料映像」の場合、情報がもはや完全に欠落していることから、シーン・シークエンス間の事象には、初めからあまり関心がもたれない。代わりに、視聴者が自ら蓄積してきた情報を映像と照合することでシーン・シークエンスが検証・確定されていく。例えば、「この場所はどこか」について検討を行うと、すぐさま過去の写真や雑誌記事、時には別の映像などが大量に持ち寄られる。これらの情報は、記録時を起点とすれば、トピックスに関する過去と未来の情報も含まれる。つまり、史料映像では、映像「内」に情報が集中し、それらが時間的に「重層的」に形成されていく。

史料映像に関してはさらに、シーン・シークエンス「間」に関する情報が欠落している分、映像の切断に抵抗感が少ない傾向が見られる。 史料映像は部分映像(フッテージ)化しやすい傾向があると言ってもよい。ただし、史料映像のこの特徴には利点と欠点がある。利点としては、フッテージ化により文献資料の巨大な引用の連鎖に加われる可能性を、映像がもてるようになる。その一方で、懸念される事態として、映像の価値が固定化され、解釈の余地を消失させてしまう可能性もある。実際、分析の過程では、別シーンとの情報整合性により後日、あるシーンの解釈が変わるケースも存在する。

本発表では、映像そのものにリニア性を保た せながら部分活用も可能にする方途はないか、 あるとすればどのような可能性があるか、につ いても考えたい。

【参考文献】

Steve Blandford, *The Film Studies Dictionary*, Hodder Education, 2001

白鳥芳朗(編), *東南アジア山地民族誌*, 講談 社, 1978

岡田薫/竹下友章, 1世紀前の邦人社会論じる 移民が撮影の映像や写真紹介, 日刊まにら新聞, 2021年7月20日号, https://www.manilashimbun.com/category/society/news258525.ht ml (Accessed 2021-05-11

最適なキュレーションの探し方

How to Find the best curation for You

原 翔子* HARA, Shoko

Resume:

本研究では、過去に開催された展覧会について、展示作品を機械学習によってクラスタリングし、キュレーションし直す。これにより、選択したパラメータに従って多様なキュレーションの可能性があることを示す。さらには、クラスタリング結果から、作品が含まれているクラスターともとの章立てとの比較検討をおこなう。展覧会を対象として非美術史的な観点からアプローチしている点が本研究の独自性である。

1. はじめに

一般的な美術の展覧会では、キュレーションが施された状態で作品が展示されている。章立てが設けられ、企画者の意図に従って並べられた作品を、来場者は展示順路に従って順番に鑑賞していく。展示フロアが複数の階にわたっている場合において、順路を遡ることは特に困難である。

一通り鑑賞し終わり、後で展覧会のことを振り返る際には、公式図録が大いに活用されうる。図録上であれば、紙の印刷面の問題は多少あるものの、空間や章立ての制約なしに作品を見比べることが可能になる。巻頭から巻末まで順番にページをめくる必要もない。そこで本研究では、図録に掲載されているメタデータをもとに展示作品をクラスタリングすることで、従来のキュレーションにはない、美術史を無視した新たな鑑賞視点を明らかにする。

以下ではまず、キュレーションという行為そのものと、絵画をクラスタリングすることに関連する研究を挙げる。次に、分析手法を示したうえで、今回の分析対象となる展覧会について記述する。最後に、クラスター分析の結果とそこから得られた事実をまとめる。

2. 関連研究

キュレーションという言葉はもともと博物館や美術業界で用いられていたが、現在では「キュレーションメディア」や「キュレーションサイト」のように、特定の視点から情報を取捨選択し編集するという意味で幅広く用いられている。キュレ

ーションによって情報を整理することで不必要な側面がそぎ落とされ、関連する内容を結び付けたうえで理解することが可能になる¹。同時に、キュレーションによって、既存の枠組みの中では見えてこなかった新たな発見があることや、それがイノベーションにつながるという指摘がなされている²。また、美術作品をクラスタリングすることに関連しては、深層学習によって西洋絵画を分類した研究がある³。

3. 分析手法

クラスタリングそのものは、展示作品の一覧とメタデータを公開しているすべての展覧会に対して適応可能である。具体的には、図録に掲載されているすべての作品について、配置されている章の番号、作品番号、作家名、作品名、制作年、技法/材質、サイズなどがある。これらをただExcel上で一覧にするだけでも、各メタデータの項目ごとにフィルターをかけることが可能になり、そこから出品作品の全体像を把握することができる。たとえば、制作年順に並べることができるだけでなく、各章に散らばった同一作家の作品がどのような割合で配置されているのかを確認することができる。

本研究では上記のメタデータから特に作品名と作家名について着目する。分析には KH Coderを用いて、作家名と作品名から得られる抽出語の関連から、階層的クラスター分析をおこなう。実際の章立てと比較したうえで、クラスタリング結果によってもたらされた視点を検討していく。

*はら しょうこ (東京大学大学院学際情報学府)

4. 分析対象

本研究では 2021 年から 2022 年にかけて三菱一号館美術館において開催された『イスラエル博物館所蔵 印象派・光の系譜』を対象とする。図録の巻末に掲載されている出品作品リストによると、I からIVの 4章で構成されており、I では「水の風景と反映」と題して、川沿いや海辺の風景が描かれた作品が配置されている。II では「自然と人のいる風景」と題して森や農村の風景が描かれた作品が配置されている。III では「都市の情景」と題して文化的な生活の様子が描かれた作品が配置されている。IVでは「人物と静物」と題して肖像画や静物画が配置されている。本研究の分析においては全79作品を対象とする。

5.分析結果

各作品について、作品名と作家名が同一のセルに含まれた状態で計量テキスト分析をおこない、抽出語同士の関連を可視化したものが、図1の階層的クラスター分析の結果である。色分けされているそれぞれのクラスターを、展覧会を構成する各章としてとらえることもできるだろう。この展覧会ではIに27作品という全体の約3分の1が配置されており、一概に水の風景といっても、描かれているものの中には運河や釣りなどさまざまあることがわかる。一方で、静物画と肖像画が近しいクラスターに配置されているのは、IVと通ずる部分がある。

ほかにも、章立てによって同傾向として認識された作品であっても、気づけないことがある。たとえば、本研究のクラスタリング結果からは、水の風景とは切り離した状態で陽光を捉えることができるだろう。水の反射として描かれたものにとどまらず、あらゆる方法で表現される陽光に着目した展示構成というのもあり得るのではないだろうか。

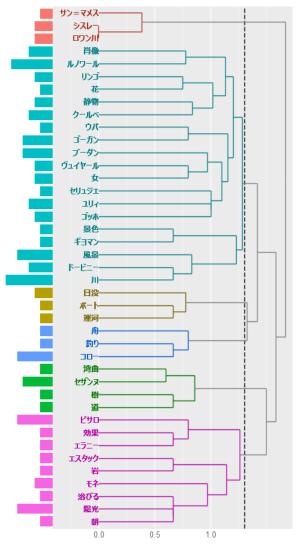


図1 階層的クラスター分析の結果

6.おわりに

本研究で分析対象とした『イスラエル博物館所蔵 印象派・光の系譜』では、レッサー・ユリィという日本ではあまり知名度のなかった作家の「夜のポツダム広場」が脚光を浴びた。「夜のポツダム広場」の他にも数点出品されたユリィの作品の魅力を発見する際にも、本研究の成果が大きく貢献するだろう。今後は、他の展覧会について、複数のクラスタリング結果の比較をとおして展示構成の再検討を試みる。

¹ Persohn Lindsay, Curation as methodology, Qualitative Research Vol.21, No.1 (2021), pp.20-41.

² Litchfield Robert C., Gilson Lucy L., Curating collections of ideas: Museum as metaphor in the management of creativity, Industrial Marketing Management Vol.42, No.1 (2013), pp.106-112.

³ Elgammal Ahmed, et al., The shape of art history in the eyes of the machine, Proceedings of the AAAI Conference on Artificial Intelligence, Vol.32, No.1(2018).

学校史料のアーカイブ化に見る課題と展望 ――旧制東京音楽学校史料の可視化と共有化を事例に

Issues and prospects seen from archiving school historical materials: Taking the historical materials of the Tokyo Academy of Music as an example

> 橋本 久美子* HASHIMOTO, Kumiko

Resume:

学校史料をアーカイブズとして可視化・共有化することで、自校史の検証や編纂に留まらず、日本近現代史への学際的な視点構築と社会貢献につながるのではなかろうか。東京音楽学校(現・東京藝術大学音楽学部)の史料の活用例から見える課題と展望について述べる。

1. 東京藝術大学における百年史後の模索

東京藝術大学(以下、藝大)は、官立専門学校、 東京音楽学校と東京美術学校が戦後に統合され た大学である。大学の創立百周年記念事業として、 昭和62(1987)年から平成16(2004)年に百年 史全12巻が刊行され、平成21(2009)年に音楽 学部に大学史史料の専用室「学史編纂室」が設け られた(2年後「大学史史料室」と改称)。美術学 部には昭和39(1964)年に教育資料編纂室が設 けられ、2学部はそれぞれ百年史を編集し、アー カイブズへの道を探ってきた1。音楽学校史料を 事例に、史料の特性、課題と展望等を検討する。

2. 音楽学部史料の概要と特徴

2.1 大学史史料室の開室

大学史史料室(以下、史料室)の開設にあたり、全国の大学アーカイブズのウェブ調査、電話調査、訪問調査、さらに個人で利用者として閲覧や複写を行い、計 31 施設を参考にした。予約した資料に付箋が挟まれ、追加資料が提案されるなど親切な対応をいただいた。史料室でも史料リストに検索キーワードを加え、利用者の便宜を図っている。

2.2 史料の概要

関東大震災と空襲の被害を免れた藝大は、開校 以来の史料を有する²。開室当初は百年史資料な ど文書(全て"約") 5000点、刊行物 1000点、演 奏会プログラム 1000点、写真 1400点、ポスタ 一300点、CD/DVD100点、インタビュー録音な どのテープ 100点であったが、その後文書は事 務より移され 1.5倍になり、皆無に近かった書籍、 楽譜、手稿譜、ノート、写真、演奏会資料、成果物など、13年間で約150の個人と機関から書架延長100メートル超の史料を受贈した。

2.3 史料の特徴と時代背景

東京音楽学校らしい史料の一例が明治時代以来の演奏会プログラムである。簡素な B6 判から現在の A4 判カラー印刷になり、演奏技術の向上が曲目にも反映する。ユダヤ人指揮者の名前は昭和 12 年で消え、ナチス推薦の教師が着任する。長唄や筝曲でも戦意高揚の新作が作られた。

行事の記録 2 例を記す。昭和 18 (1943) 年 9 月に東京音楽学校が山本五十六の郷里・長岡で行った『山本元帥讃仰演奏旅行』は 3 泊 4 日の旅程で、136 名が 4 班に分かれ宿泊した旅館名、運搬した楽器、弁当代もわかる。『満州建国十周年慶祝演奏旅行』は校長以下総勢約 140 名の演奏団の旅行 2 分冊の綴りである。旅程、曲目、満州国資料、参加者の健康状態、演奏の出来不出来の報告など、臨場感あふれる記録である。

東京音楽学校史料を活用すれば、音楽を含めた近現代史が新たに見えてくるのではなかろうか。

3. 発信と普及の試み

3.1 展示から見えた課題

同一室内で業務、閲覧利用、収蔵を行う史料室では³、平成22(2010)年より文化祭に職場を一般公開し、公文書や寄贈史料を展示してきた。来場者の過半が音楽関係者以外である。①楽譜、②文字史料、③写真のうち、来場者が史料の前に立ち止まる時間は①②③の順に長く、楽譜は時間をか

^{*}はしもと くみこ (東京藝術大学音楽学部大学史史料室)

けて見る人と素通りする人に分かれる。しかし演奏が聞こえると、演奏が終わるまで楽譜を追う方が増える。

その経験は平成24(2012)年、美術館で美術側との共同企画による音楽学校と美術学校の依嘱事業展に生かされた。美術学校製作の観音立像や観音像木型と並べば、作曲依頼文書や楽譜は視覚的な魅力や内容を伝える力に欠ける。そこで自筆譜と音源が連動するコンテンツをタブレット端末に入れ、ヘッドホンで視聴できるようにすることで、音楽と楽譜を同時に楽しむ環境を整えた。

3.2 戦没学生の作品のアーカイブ化

史料室では平成 27 (2015) 年に東京音楽学校の学徒出陣の調査を開始し、各種資料から入隊や戦没の記録を収集した。また平成 29 (2017) 年より、遺された譜面を演奏で蘇らせるプロジェクト「戦没学生のメッセージ」を演奏藝術センターと共同で行う。その特徴は、演奏会が初めからアーカイブズを目的に開催される点にある4。

音楽学校生が学ぶ作曲の基礎は、戦時下でも特段の変化はなかったが、彼らの私的な作曲には戦争が影を落とす。《かなしいものよ》《雨》《鎮魂歌》《君のため》、《別れの曲》《昭南島入城祝歌》《軍隊生活》(スケッチ)などが該当する。

4. 課題と展望

戦没学生のプロジェクトを中心に述べる。戦没 学生の遺品を収集する大学はあるが、楽譜と音源 のアーカイブ化は他に類例を見ない。本人が完成 したと考えていないかもしれない習作を演奏し、 音源を残すことには慎重さを要するが、それでも 戦没学生の作品を伝える意義はあると考える。

戦没学生の一人、鬼頭恭一が築城海軍航空隊で訓練の合間に作曲した歌曲《雨》を事例に課題と展望を述べる。鬼頭が妹に宛てたハガキは、鍛錬の様子を伝え、妹に勉学を促す内容である。だが彼が歌曲に選んだ「雨」は、和歌山県の女性の詩で、南方に散った夫の形見を受け取る内容である。ピアノ前奏が雨を模し、橘の花の香る季節に、夫の形見が届く。和音の連打が女性の慟哭と重なる。再び静けさが戻り悲しみの雨は降り続く。

鬼頭は特攻志願を表明しながら、夫を戦争で亡くした女性の詩に作曲した。理不尽な戦争への思いを音楽に託し、昭和20(1945)年7月29日、霞ヶ浦にて「秋水」の練習機で訓練中に殉職した。

《雨》は、潔い言葉しか残さなかった多くの学徒の心情の代言ともなり得よう。音源のアーカイブズは、言語や数字による戦時記録からは読み取れない情報を補う可能性もあると考える。

戦没学生の作品と音源は、戦時研究や学徒出陣の研究に新たな知見を生む可能性もあろう。生死紙一重の音楽学徒が全霊を傾けた音楽には、歴史観の違いを乗り越えさせる力があるのではないか。戦没学生の作品をアーカイブ化する意味の一つもそこにあると考える。共有されやすいアーカイブズ構築と、共同研究の実践が課題となる。

校史史料のアーカイブズの充実と共有化から 教育史、文化史、国際関係史など時間軸とテーマ 研究の未来図を描くことも不可能ではなかろう。

 $^{^{1}}$ 橋本久美子「東京藝術大学音楽学部におけるアーカイブズの現状と課題」『東京藝術大学音楽学部紀要』第 47 集 $(2022 \mp 3 \, \mathrm{J})$, p69-84.

² 東京音楽学校の前身、音楽取調掛時代の文書は、史料室開室以前に附属図書館所蔵となっている。

³ 開室当初の環境は変わらないが、別に3箇所の書庫・収納スペースが増設された。

⁴ 藝大のホームページより下記の戦時下関連の映像・音源が公開されている。

⁽¹⁾ 戦時音楽学生 Web アーカイブズ〈声聴館〉https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/ (Opened 2017-04-01, Accessed 2022-05-10). (2)「戦没学生のメッセージ:戦時下の東京音楽学校・東京美術学校」 2017 年 7月 30日,奏楽堂, http://arcmusic.geidai.ac.jp/8371(Accessed 2022-05-10). (3)「戦没学生のメッセージ II:戦 時下の音楽~教師と生徒」 2018 年 7月 29日,奏楽堂, http://arcmusic.geidai.ac.jp/9072(Accessed 2022-05-10). (4)「戦争の時代の音楽:戦争の記憶を語り継ぐ」,2020 年 12月 6日,音楽学部第 6 ホール,

http://arcmusic.geidai.ac.jp/10284(Accessed 2022-05-10).(5)東京藝大 I LOVE YOU プロジェクト「音楽に託された未来:東京音楽学校のアーカイブズ史料より」, 2021 年 10 月 2 日,音楽学部第 6 ホール

[•]演奏会音源 https://archives.geidai.ac.jp/contents/20211002-iloveyou/ (Accessed 2022-05-10).

[・]日本語版解説 https://archives.geidai.ac.jp/files/2022/02/ily2021-jp.pdf (Accessed 2022-05-10).

[・]英語版解説 https://archives.geidai.ac.jp/files/2022/02/ily2021-en.pdf(Accessed 2022-05-10).

小規模建築資料の整理と研究利用への試み ——渡辺仁、岸田日出刀資料を事例として

Organization and research application attempt of a modest scale of $architectural\ materials$

- As a case study of WATNABE Jin, and KISIDA Hideto materials -

飛田 ちづる* TOBITA, Chizuru

Resume:

収蔵資料のうち、小規模な建築資料を用いて、調査研究を行える可能性を検討した。単独で展覧会を開催できる規模ではないものの、現存する建築と資料の比較、他組織に収蔵されている資料と組み合わせることで、可能性は十分ある。

1. 背景と目的

本報告は、文化庁国立近現代建築資料館(以下、 資料館)の収蔵資料のうち、比較的小規模な渡辺 仁資料と岸田日出刀資料を用いて、他の資料や調 査と合わせ、小規模な資料を調査研究に使用でき る可能性を探るものである。

資料館の収蔵資料は、アイテム数1万点前後からそれ以上のものが多く、渡辺仁はアイテムレベルで約500、岸田日出刀は約200と桁が異なる。

また、資料館で収蔵資料を周知する手法として 展覧会を開催してきたが、渡辺仁資料、岸田日出 刀資料共、収蔵品展に一、二度出陳したのみであ る。内容も、大規模資料が、建築家の活動を包括 的に把握できるもの、あるいは活動を通じた多く のプロジェクトを把握できるような図面、および 建築家の活動や思考を辿れる資料であることに 対し、運よく遺された資料に見える。

アーカイブズとして、包括的に収蔵できれば、 各建築家の研究、あるいは当時の建築業界を知る 資料とできるだろう。しかし、建築の研究は、筆 者の属する建築史に限っても、一箇所に収められ た資料に限らず、現存する建築や他所の資料を組 み合わせて行う。

本報告は、両氏の研究、あるいは建築史研究に、 資料館の資料を用いて行える可能性を試行する ものである。

なお、資料館では付与した寄贈された順にフォンド番号である 13 番の渡辺仁資料、20 番の岸田日出刀資料の順に述べる。

2. 各資料の内容と構成

2.1 渡辺仁資料

1) 渡辺仁について

渡辺仁は、明治 20 (1887) 年に生まれ、東京帝国大学を卒業。渡辺仁建築工務所を立ち上げ設計活動を始めた。代表作は、東京国立博物館(東京都台東区)、服部時計店(東京都中央区)、小田急(東京都新宿区)、横浜のホテルニューグランド(神奈川県横浜市)が挙げられる。

2) 渡辺仁資料の内容と構成

渡辺仁の建築活動を断片的に伝えるものであり、図面、スケッチ、原稿、写真などから構成される¹。また、設計競技の景品や葉書、業務文書などもあり、当時の日常を推測できる部分もある。なお、特定のプロジェクトの図面もわずかに存在するが、多くは断片的な情報にとどまる。多様な形態であるが、小規模なため、同一の収蔵庫内で保管している。

2.2 岸田日出刀資料

1) 岸田日出刀について

岸田日出刀は、明治 32 (1899) 年に生まれ東京帝国大学を卒業後、同大学の助教授を勤め昭和 4 (1929) 年には教授、建築界等の要職も勤めている。昭和 41 (1966) 年に逝去した²。昭和 39 (1964) 年開催の東京五輪の施設委員長として欧州と米国を視察し日記を残している。

^{*}とびた ちづる (元文化庁国立近現代建築資料館研究補佐員)

2) 資料の内容と構成

岸田日出刀資料は、岸田建築研究所作成の図面と、岸田日出刀個人資料に大別される。図面は80枚程度、個人資料は調査旅行等の日記帳三冊、調査時に撮影した写真を収めたマイクロフィルム、自著、他著、その他の文書に分けられる。

図面も個人資料も、特定のプロジェクトがまと められているわけではない。日記帳は、三冊収蔵 されているうちの一部の翻刻も試みたが、それだ けでは岸田の生涯や設計活動はわからない。

3. 資料の研究資料としての活用の試み

3.1 渡辺仁資料の活用の試み

渡辺仁の作品は、関東近郊を中心に所在し、かつ公共建築や商業建築が多く、容易に足を運べる。また、資料の中にスケッチが多く含まれ、かつ洋行時、或いは、雑誌等に掲載された図面の模写と推察される図面が残されている。他に、実物から摺ったように見える虹梁なども残る。これらから渡辺の関心を推察し、現存する建築と比較することで、渡辺仁の建築観の一端を知ることも可能だと思われる。

1) ホテルニューグランド

昭和 2 (1927) 年に竣工。全体の平面図は入 手できなかったが、概観やファサード、細部の意 匠等を用いて収蔵資料と比較することは可能と 思われる。竣工当時の写真資料も残ると思われる。

2) 服部時計店

昭和7 (1932) 年竣工。銀座の一角に位置する建物であり、平面図の入手はできなかったが、概観やファサード、細部の意匠の比較はホテルニューグランドと同様である。また、収蔵資料に、竣工当時の写真集が収蔵されているため、現状と当時を比較可能と思われる。

3) 東京国立博物館

昭和12(1937)年竣工。「東京帝室博物館建

築設計図案懸賞募集」の一等当選案(渡辺仁案)を原案とし、宮内省内匠寮が実施にあたった³。 「日本趣味を貴重とする東洋式」が条件とされた

ものの、中庭を囲む日の字型の平面計画は、洋行時スケッチや模写と思われる図面の影響も見られると推察する。当選案と現存建築との相違点に注意が必要だが、比較研究は行えると思われる。

3.2 岸田日出刀資料の活用の試み

岸田日出刀資料は、資料館に加えて金沢工業大 学建築アーカイヴズにも収蔵されている。

資料館の収蔵資料から岸田の活動の全てを見通すことはできず、金沢工業大学建築アーカイヴズのサイト上では「東京帝国大学工学部建築学教室/講義ノート、論文、図面、写真など」と記載されている。図面は、資料館に収蔵されているものと合わせ、全体像をつかめる可能性もある。また、先行研究4や出版されている書籍も参考となる。写真は、図面や日記帳と関連付けられるものか、あるいは資料館に収蔵されているが、一部が当初から欠けているフィルムを現像したものか否かの確認が必要である。

また、岸田の設計した建築のうち現存するものは衆議院議長公邸、倉吉市庁舎が挙げられる。資料の関連を探すこと、或いは、知られざる軌跡を探すことなどが考えられる。まずは著作物を読み、その思考を把握することから始められる。

4.まとめ

本報告は、小規模資料の活用として、一箇所に収蔵されている資料に限らず、いくつかを組み合わせて調査研究に用いられる可能性を検討した。

一箇所の収蔵資料がわずかであっても、利用者の用い方により、十分活用しえる貴重な資料であり、収蔵の意義のあることを改めて示すためにも、元資料担当者として、今後は実際に調査と研究を行い、報告をしたい。

¹ 文化庁国立近現代建築資料館,収蔵資料,渡辺仁資料 https://nama.bunka.go.jp/collection/watanabe/ (Accessed 2022-05-11)

 $^{^2}$ 「岸田日出刀 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所) https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9021.html(閲覧日 2022-05-11)

³ 文化庁,文化遺産オンライン https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/187846 (Accessed 2022-05-011)

⁴ 勝原基貴「大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念に関する研究」、拙著「岸田日出刀の 1964 年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告」など。

ポスターセッション

学習指導要領 LOD の公開と 活用の検討

阿児雄之(東京国立博物館)·有山裕美子(軽井沢 風越学園)·江草由佳(国立教育政策研究所)·榎 本聡(日本女子大学)·大井将生(東京大学大学院 学際情報学府/TRC-ADEAC)·高久雅生(筑波大学)

文部科学省が整備を進めている教育データのひと つに「学習指導要領コード」がある。このコードは、 学習指導要領の全項目を対象として付与されている ものであり、博物館・美術館等が有する所蔵作品のデ ジタルコンテンツと学習指導要領とを紐づける際に 効果を発揮すると考えられる(なお、この紐づけと効 果想定については、2021年度年次大会で発表済み)。 各学校や教科書発行者での活用も期待されるコード であるが、残念ながら文部科学省からの提供は Excel ファイルと CSV ファイルでの配布に限られている。 その為、機械可読性が低く、システムへの実装や連携 が困難になってしまっている。よって、発表者らは、 公開提供されている学習指導要領コード表をもとに、 学習指導要領コードと関連する情報を追加した Linked Open Data である「学習指導要領 LOD」を 制作し公開した(https://w3id.org/jp-cos/)。これに よって、ジャパンサーチといった各種デジタルアー カイブとの連携推進も加速し、学校教育と博物館・美 術館の接続が密接になると考える。

阿児 雄之 (あこ たかゆき)

東京国立博物館

東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻修了。 博士(学術)。東京工業大学博物館特任講師などを経て、2018 年から現職。専門は文化財科学、博物館情報学。分担執筆 著書に「デジタルアーカイブ活用の技術―美術館・博物館 の例」『入門デジタルアーカイブ』(古今書院、2017)他。

修復ドキュメンテーション (Conservation Documentation) の 共有化近年の議論と オープンサイエンスとの関わり

本間友(慶應義塾ミュージアム・コモンズ)

近年、保存・修復活動の過程で得られる情報を「修 復ドキュメンテーション」として蓄積し、専門家に対 して、さらにはより広く社会に対して共有すること の必要性と潜在的価値が議論されている。その一方 で、現実に共有を進めるにあたっては、加工されない ままの情報が共有されることで、修復の内容が誤っ て解釈されたり、不適切に踏襲されてしまう可能性 や、あるいはセキュリティや個人保護の面でのリス クなど、様々な課題が存在し、必ずしも取り組みが進 んでいるとはいえない。修復ドキュメンテーション が、論考という形で学会誌等で発表されているもの、 記録をまとめて報告書として刊行されるもの、一般 に公表されていないが非公表の資料としてまとめら れているもの、あるいは写真やデータの単位で保存 されているものなど、多様な形式と管理方法の元に 存在することも難しさの一因となっている。

本発表では、修復ドキュメンテーションの共有化 を巡る課題と、研究データのオープン化を巡る議論 との共通点に着目した上で、修復ドキュメンテーションの共有を前に進めていくための方法についての 試案を共有したい。

本間 友 (ほんま ゆう)

慶應義塾大学ミュージアム・コモンズ専任講師

アート・センター所員

慶應義塾大学大学院(美学美術史学)修了後、同大学アート・センターにて展覧会の企画、アーカイヴの運営、地域連携プロジェクトの立案を行う。2018年よりミュージアム・コモンズの立ち上げに関わる。造形美術における「境界」表現について、また学術情報の文化イベントを通じたディストリビューションに焦点を当てた研究を行っている。

活版印刷文化の伝承 -マインツ・インパルスへの協力

式洋子(印刷博物館)· 寺師太郎(凸版印刷)

西洋式活版印刷術を発明したヨハネス・グーテンベルク。生誕の地マインツ(ドイツ)には世界最古級の印刷・出版文化施設グーテンベルク博物館がある。当地では、2020年9月に活版印刷文化の保存と継承に関する宣言「マインツ・インパルス」を発表。賛同者を募る署名活動を展開しており、目標の一つに活版印刷術のユネスコ無形文化遺産登録を掲げている。

印刷博物館(東京)では、印刷と人間との関係を文 化文明史的な視点から調査研究し、未来へ継承して いく活動に注力している。なかでも、活版印刷が果た してきた役割を検証し、その技術を保存・伝承してい くことは重要なテーマとして捉えている。当館では、 活字の製造工程における貴重な職人技術を映像化、 アーカイブし、一般に公開している。また活版印刷の 動態保存を担う印刷工房では、現場を知る職人から 活字の文選、組版、印刷といった工程を学ぶ技術伝承 を続けてきた。

活版印刷文化の保存と継承という点で志をともにする当館から、グーテンベルク博物館への協力を申し出、「マインツ・インパルス」に協力することとなった。当館で実践している一連の活動について報告する。

式 洋子(しき ようこ)

印刷博物館 学芸員

2008 年凸版印刷株式会社入社。出版印刷営業・販促部門、IR 部門を経て 2019 年より現職。「和書ルネサンス 江戸・明治初期の本にみる伝統と革新」展 (2021年)を担当。国内外の印刷文化の調査・研究のほか博物館広報、教育・普及活動、国際博物館連合をはじめ海外印刷関連施設との交流に従事。大学では西洋美術史を専攻。

Blast From the Past:

「アート・アーカイヴ資料展」ハブと してのアーカイヴを視覚化する

森山緑 (慶應義塾大学アート・センター)・ 石本華江 (慶應義塾大学アート・センター)

慶應義塾大学アート・センターのアート・アーカイヴ (以下、アーカイヴ)は1998年の設立以来26回、資料を 用いた展示「アート・アーカイヴ資料展」を開催してき た。地味で地道な業務が大半を占めるアーカイヴ活動だか らこそ、情報発信が非常に重要であると考える。特に展覧 会という形式はテーマを立てることにより「ある視点」を 提示でき、研究成果を示すことで活動を評価可能にするた めの契機となる。だが情報・資料をどのように発信してゆ くのか、様々な見地からの議論が必要である。

本発表では上述した展示「ノートする四人一土方、瀧 ロ、ノグチ、油井」「土方巽+中西夏之 背面」「タケミヤ からの招待状」などの事例を上げ、アーカイヴが所管する 資料をいかに展示に活かし、発表の場として展覧会を構築 してきたかを示す。展覧会を開催したことによってフィー ドバックが起こり、さらなる資料の物理的充実と研究調査 の発展に寄与していることを示したい。

未来を思考するために、過去からの「Blast(風)」を受けることで現在求められている新たな視座を追考する。過去という「動的な出来事」から現在に何を仕掛け、未来へと繋いでゆくのか、その問いはアーカイヴが果たさなければならない役割である。

森山 緑(もりやま みどり)

慶應義塾大学アート・センター所員、学芸員 専門は近現代美術史。アーカイヴでは資料の整理保存、調査 対応、貸出を行う。アート・アーカイヴ講座を担当。

石本 華江 (いしもと かえ)

慶應義塾大学アート・センター所員、学芸員 舞踏家、講師として 21 カ国に招聘、また舞踏譜の研究会も 主催する。慶應義塾大学非常勤講師、土方巽アーカイヴ担当。

デジタルアーカイブサロン 12 年の歴史

デジタルアーカイブサロン (アート・ドキュメンテーション学会)

2009年12月の準備会から始まったデジタルアーカイブサロンは、2011年3月11日の東日本大震災当日の中止をはさんで、毎月1回(毎月第2金曜日)、休むことなく開催してきました。そして、13回の番外編を含むと、通算150回を越えています。現在までの延べ参加人数は1,200人以上、参加者名簿としては300名近く(会員以外の参加者も含む)になり、JADS会員のほぼ半分の方が1度はサロンに参加していただいているような状況です。

サロンでは、これまで様々なテーマを扱ってきま した。これまでの活動と今後のサロンの活動計画と ともにお話しいたします。

デジタルアーカイブサロン

アート・ドキュメンテーション学会会員を中心に、月に1回集まり、最新デジタルアーカイブについての技術やコンセプト等の情報を交換し合う場所(サロン)として発足。日本全国の博物館、美術館、文書館等に対して、最新技術と知見で効果的なデジタルアーカイブ化に貢献するための受け皿となる事を目標に活動している。

https://www.facebook.com/jadsdigitalarchivesalon/



JADS Archives and Archival Methods SIG

(学会アーカイブ SIG) の活動

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG)

2021 年度、新たに発足した本 SIG は、アート・ドキュメンテーション学会 30 周年記念事業のひとつとして検討が重ねられてきた議論を引き継ぎ、学会の活動を将来にわたって記録・保存・利活用できる「学会アーカイブ」の設立に向けての具体的方針や運用方法を検討することを目的としています。 SIGでは、JADS 会員のみが参加できる学会アーカイブの在り方・設立等を中心に検討する「会合」と、講師を招き広くアーカイブ等に関心ある方々が参加できる「勉強会」の開催を主たる活動にしていこうと考えています。ひと月に一回のペースで、会合もしくは勉強会を開催していますので、ご関心のある方は、是非ご参加ください。

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG)

ひと月に一回のペースで、アート・ドキュメンテーション 学会における学会アーカイブの在り方等を検討する「会合 (参加は JADS 会員限定)」と、広く学協会のアーカイブ 等をテーマとして学ぶ「勉強会」を開催しています。JADS 会員に限らず、どなたでも参加可能な勉強会の開催記録や 予定は、SIG のウェブサイトをご覧ください。

https://sites.google.com/view/jads-aam-sig/



【動向紹介】 6月12日(日) 16:20-17:10

JADS の活動に関連の深い、最新技術の動向、法令改正の動向など、会員の皆さまが関心を持っているトピックについて、最新情報を提供するセッションです。研究発表で取り上げるには、まだ新しすぎるテーマ・話題であっても、将来の方向性や可能性を予見させる場となり、延いては、ここから新たな研究、多様な研究が生まれるきっかけを生むことを期待しています。

デジタルアーカイブにおける NFT とブロックチェーンの意味

前川充(オムニアート合同会社)

NFT (Non-Fungible Token、非代替性トークン) はデジタルアートの高額な取り引きで過熱気味だが、 ここでは別の観点から論考する。

NFT はブロックチェーン技術で管理することで、 デジタル作品に対して作品の一点性、希少性を保証 するものである。

著作権や利用権がグレーゾーンに陥りやすいデジタルアーカイブにおいて、NFTを利用することで、権利処理と二次利用、収益化の可能性を提示したい。さらには、個人的希望の範囲を出ないが、有体物であるアート作品や文化財の利用と権利処理におけるNFTへの期待も述べてみたい。

前川 充 (まえかわ みつる)

オムニアート合同会社 社長

日本映像アーキビスト協会(JAMIA) 理事

Creative Commons Japan 事務局メンバー

AMIA (動画アーキビスト協会) 会員

南山大学、日本アイ・ビー・エム、などでソフトウェア・ エンジニア、ノーテル・ネットワークス、シスコシステム ズなどでマーケティングに従事。

IT技術を、アートや映像、音楽、街づくりなどの文化の伝播・継承に役立てるためにオムニアート合同会社を起業。

博物館法改正について

栗原祐司 (京都国立博物館)

本年4月、博物館法の一部を改正する法律が可決、 成立した。1951年の法制定以来、26回目の法改正だ が、博物館法単独で改正したのは 1955 年以来実に 67年ぶりのことである。国立博物館等が引き続き登 録博物館の適用除外となり、博物館相当施設制度は 存続し、学芸員制度の見直しが先送りとされるなど、 課題は残されているが、まずは第一歩であろう。改正 法の施行は来年4月1日からで、設置者要件が緩和 された新たな登録制度は今年度中に登録基準を制定 し、5年間の移行措置期間が設けられる。本学会との 関係では、博物館の事業に博物館資料のデジタル・ア ーカイブ化が明文化された。また、衆参ともに附帯決 議がつけられ、「登録の審査に当たっては、博物館の 社会教育施設としての役割を尊重し、過度に利益を 求めないという非営利性に配慮の上、公益性及び公 共性の確保に十分留意すること」とされたことも注 目に値する。

折しも、本年 8 月 20~28 日に開催される ICOM プラハ大会では、ICOM 規約に定める Museum の定義が改正される見込みで、既にその案文も示されている。本動向紹介では、こうした国際的な動きも踏まえ、今後の博物館政策の在り方について考察する。

栗原 祐司(くりはら ゆうじ)

京都国立博物館副館長

1966 年東京生まれ。上智大学法学部卒業。文部科学省社会教育課企画官、文化庁美術学芸課長、東京国立博物館総務部長、国立文化財機構事務局長等を経て、2016 年 10 月より現職。日本博物館協会理事、ICOM 日本委員会副委員長、國學院大學大学院、国際基督教大学、花園大学非常勤講師。著書に『基礎から学ぶ博物館法規』(同成社)、『教養として知っておきたい博物館の世界』(誠文堂新光社)等。

活動紹介

6月12日(日) 17:10-17:40

新型コロナウイルスの感染症拡大により、文化施設に赴くことが難しい日々が続きました。その中でも新たに開館したり、リニューアルしたり、新しい活動は日々行われています。

今年は新しい試みとして、「活動紹介」のセッションを設け、JADS の活動に関連の深い機関や団体について、活動の紹介をしていただきます。

長野県立美術館 アートライブラリーへようこそ

長野県立美術館 長野県長野市箱清水 1-4-4

長野県立美術館 HP https://nagano.art.museum/

長野県立美術館アートライブラリー

https://nagano.art.museum/artlibrary

2021年4月長野県立美術館のリニューアルに伴い新しく設置されたアートライブラリーでは、当館開催の展覧会図録をはじめ、開催中展覧会関連図書や他機関の展覧会図録、また、近代美術を軸に美術の関連図書や全集、美術雑誌、しかけ絵本といったラインナップで閲覧室を形成している。書棚の一部には展示ケースを入れ込み、図書室内展示が出来るようになっており、昨年度はJAXAとのコラボ展を開催。

老若男女、一般の方から調査研究に従事する方に 至るまで、幅広い来館利用者が気軽に利用すること ができ、専門図書室としては敷居の低い、"ほんの少 しの時間だけでも立ち寄りたい!"と思ってもらえ る空間づくりを目指しながら図書室運営を行ってい る。

矢口 琴衣 (やぐち ことい)

長野県立美術館 学芸課学芸専門員

アートライブラリー担当 司書

國學院大學文学部史学科 卒業

佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程 修了 茨城県天心記念五浦美術館 展示解説員・学芸嘱託員、国立 研究開発法人 防災科学技術研究所 社会防災システム領 域 アウトリーチ・国際研究推進センター 自然災害情報室 司書、独立行政法人 国立科学博物館 経営管理部 研究推 進・管理課 図書情報担当を経て、現職。

化粧文化を身近なものに 〜ポーラ文化研究所の オンラインサービス〜

ポーラ文化研究所

東京都品川区西五反田 2-2-10 ポーラ第 2 五反田ビル 1F ポーラ文化研究所ウェブサイト

https://cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/ 化粧文化データベース

https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G000 0427poladb

オンラインレファレンス申し込み https://polabunken.peatix.com/

ポーラ文化研究所は「本当の美しさは、内面の美 や心の豊かさを伴ってこそ初めて実現する」という 考えのもと 1976 年 5 月に設立、化粧文化に関わる 資料の収集・調査研究・公開を行ってきた。博物館 への展示協力、収蔵品を活用してのセミナー開催な どのほか、現代の化粧・美意識に関する調査も 197 0 年代から継続実施。公開した調査レポートは 150 件を超える。

近年ウェブサイト改修、SNS 発信、データベース公開などオンラインでのサービスに傾注。コロナ禍を契機に、化粧文化の専門図書館「ポーラ化粧文化情報センター」で長年実施してきたレファレンスをオンラインに転換、また2021年にはパリ日本文化会館で開催した展覧会のアフタートークイベントを実施した。

富澤 洋子(とみざわ ようこ)

国ポーラ文化研究所/ポーラ化粧文化情報センター 学芸員・司書

2004 年よりポーラ文化研究所にて化粧や美容の歴史や美人観の変遷など、化粧文化研究に携わる。ユニークな活動を広く社会と共有するために「ポーラ化粧文化情報センター」を 2005 年に開設。

共著『明治・大正・昭和の化粧文化』『平成美容開花』(いずれもポーラ文化研究所発行)。

「デジタルアーカイブを日常にする」 ジャパンサーチ連携の試み―電子棚札 を使ったデジタルキャプション実証実験

公益財団法人東京富士美術館 東京都八王子市谷野町 492-1

https://www.fujibi.or.jp

株式会社 CREiST

東京都品川区西五反田 2-25-2 飯嶋ビル 4F

https://www.creist.co.jp/solution-infortab/

現在東京富士美術館では、ジャパンサーチ上の自館所蔵作品データを電子棚札デバイスを使って API 連携で表示するデジタルキャプションの実証実験に取り組んでいる。美術館では所蔵作品の情報は固定されたものではなく、日々の研究等により随時更新される。この度の試みでは、所蔵作品データベースを更新すれば、半自動的に展示室のキャプションの表示が更新されるようになる。電子棚札ならではの利点もある一方、デバイスの表示性能・品質の課題や機材調達の費用対効果など検討が必要な課題もあるが、ジャパンサーチ上のデータを実際の展示室に落とし込む試みとして今後の活用の可能性を探って行きたいと考えている。

鴨木 年泰(かもぎ としやす)

東京富士美術館 学芸課長

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。1996年より東京富士美術館に学芸員として勤務。2021年9月より現職。専門は日本美術史、刀剣。東京富士美術館では展覧会企画の他、美術情報資料・収蔵品データベースを担当。1996年より全国美術館会議情報処理ワーキンググループ(2004年に情報・資料研究部会に改称)で活動。2004年より同研究部会幹事。

森 照寿(もり てるじ)

株式会社 CREiST ソリューション営業2部 部長システム開発会社のシステムエンジニア、IT ディストリビューション会社の製品営業を経て、現職にて電子棚札、電子ペーパーなど次世代ソリューションを担う営業部の部門長として従事。クライアントの業務課題解決を支援するIT ソリューションの営業活動をしながらマーケティング企画や営業企画なども兼任し、電子棚札や電子ペーパーソリューションの応用活用を企業や団体へ提案している。

アーカイブズ情報室 開室のお知らせ

大阪中之島美術館 大阪府大阪市北区中之島 4-3-1

https://nakka-art.jp/ アーカイブズ情報室

https://nakka-art.jp/collection/archive/

新たに誕生する美術館の特徴の一つとして「アーカイブ」の設置を公言してきた大阪中之島美術館が開館した。この場を借り、4月末からサービスを開始したアーカイブズ情報室の活動を紹介する。

アーカイブズ情報室は、美術館の収蔵する情報資源(準備室期間に発生した歴史公文書を除く)の収蔵管理、長期保存とアクセス維持を担う。当面はとくに、特別コレクション(収蔵作品・作家・関西の美術団体等に関わる一次資料群、希少な出版物等)の情報公開と閲覧サービスの提供、調査・研究ニーズへの対応に注力する。計画から実施に移ったばかりで、暫定的、実験的な部分も多くある。より良いサービスに向け、多様なご意見をいただきたい。

松山 ひとみ (まつやま ひとみ)

大阪中之島美術館 アーキビスト

国立公文書館認証アーキビスト。アムステルダム大学大学院メディア研究科 Professional MA(Preservation and Presentation of the Moving Image)修了。専門分野は視聴覚メディアのアーカイビング。平成 26~28 年度東京国立近代美術館フィルムセンター(現・国立映画アーカイブ)の特定研究員を経て、平成 29 年度より大阪新美術館建設準備室(大阪市)にアーカイブ専任学芸員として勤務。準備期間中に館の新名称が決まり、令和4年2月2日に大阪中之島美術館として開館した。

カンピソシ ヌカラ トゥンプ [国立アイヌ民族博物館 ライブラリ] の活動紹介

国立アイヌ民族博物館

北海道白老郡白老町若草町 2-3-1

国立アイヌ民族博物館 ウェブサイト

https://nam.go.jp/

国立アイヌ民族博物館 ライブラリ https://nam.go.jp/exhibition/floor1/

#exhibition library

アヌココロ アイヌ イコロマケンル[国立アイヌ 民族博物館]は、アイヌの歴史・文化の展示や調査研究を主題として活動する国立博物館として、北海道 白老町の、民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)内に 2020年7月にオープンしました。博物館に設置された カンピソシ ヌカラ トゥンプ [ライブラリ] は、アイヌ文化や歴史を取り上げた書籍を中心とした専門的な学術書をはじめ、世界の先住民族についての本、絵本や写真集、図鑑などを揃えた、幅広いかたがたに向けた「開かれた専門図書室」となっています。当館ならびにライブラリの設立について、また活動と特徴を紹介します。

笹木 一義(ささき かずよし)

国立アイヌ民族博物館 研究学芸部 研究主査 せんだいメディアテーク(仙台市)、日本科学未来館(東京都)などで常設展示、企画展、ワークショップ、教育普及活動、来館者を交えた実証実験などを担当。2017年11月より国立アイヌ民族博物館設立準備室に赴任。2020年7月の開館に向けて、常設展示内の体験展示コーナー「探究展示 テンパテンパ」の開発、教育普及、特別展示、ライブラリ整備等に携わる。専門は博物館学(来館者研究)。

第 15 回秋季研究集会 発表者募集

本年 2022 年度第 15 回秋季研究集会は、9 月 11 日(日)で高知県立牧野植物園とオンライン でのハイブリッドでの開催をしています¹。

本年度も昨年に引き続き、会員以外も含めた若 手研究者や新しいプロジェクトに挑戦する方々か らの「萌芽研究発表」も設けます。萌芽研究で は、そのテーマに関連する経験豊富な会員からの 講評・助言、参加者との討議を行います。加え て、優れた発表に奨励賞を授与いたします。

つきましては、「一般研究発表」、「萌芽研究発 表」を下記要領で募集いたします。

たくさんのご応募をお待ちしています。

- 発表申込み〆切: <u>2022 年 6 月 26 日(日)</u> https://forms.gle/5cxVgc72CwpxEWXc8>
- 1) 研究発表:アート・ドキュメンテーションに 関する研究・事例報告・調査報告等で、会員個人 による発表、もしくは会員を代表者とするグルー プ発表。
- ◆発表時間:25分、質疑:5分。
- ◆応募資格:アート・ドキュメンテーション学会 の正会員、学生会員、賛助会員組織にご所属の 方、名誉会員。

※一般研究発表は、非会員および団体購読会員組織ご所属の方には応募資格がありません。この機会にぜひご入会をご検討ください。

2) <u>萌芽研究発表</u> (*非 JADS 会員も応募可能) アート・ドキュメンテーションに関する、若手研 究者による自身の研究プロジェクトの発表や、現 在進行中の挑戦的なプロジェクトの紹介です。日 頃の研究を広く情報共有して、アドバイスを受けることを目的とします。グループ発表も可能です。

なお、事前に講評担当者を決定し、当日きめ細 かな講評・助言が受けられます。

- ◆発表時間:10分、講評:5分、質疑:5分
- ◆原則以下の条件を目処とします。
- ・現在大学院在籍中、あるいは大学院課程を修了 し、申込時点で専門職に就いていない方
- ・大学を卒業または大学院課程を修了し、申込時 点で専門職について5年以内の方

ただし、以上の条件を満たさない場合でも、行事・企画委員会が認めたものは発表可能とする場合があります。

※これを機会に、ぜひご入会をご検討ください。

■秋季研究集会日時:2022年9月11日(日) 場所:ハイブリッド 高知県立高知県牧野植物園&オンライン(予定)

- 9月10日(土)
- · 高知県立美術館見学 (※10名)
- 9月11日(日)

午前

- ·高知県立牧野植物園見学 (※20名) 午後
- ・秋季研究集会 (※オンサイトは 50 名限定) 野上賞受賞者発表 萌芽研究発表 研究発表

 $^{^1}$ 研究会場は内藤廣氏設計の映像ホールにて行います。当日は事前の見学会、研究会の後に牧野植物園での観月会も企画されております。なお、会場の都合上、オンサイトの参加者人数の上限を設けますことをご容赦ください。また会場は入園料がかかります。

『アート・ドキュメンテーション研究』第31号

原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第31号(2023年5月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくはJADSウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要(400字程度)、および、できれば 原稿種別(投稿規定3.を参照)を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご 連絡ください。

なお、2022年前半に、当『研究』誌の投稿規定および執筆要領を改訂いたしました。いずれもJADSのウェブサイトに掲載しておりますので、投稿の際にはこれらをご確認ください。また、エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限:2022年9月30日

原稿提出期限 : 2022年12月15日

査読 • 編集 : 2022年12月~2023年5月

投稿規定・執筆要領の掲載先:http://www.jads.org/pub/pub.html

連絡先:『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会

kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会 刊行物販売のおしらせ

2022/6

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで (別途送料がかかります)。

◆刊行物バックナンバー

```
『アート・ドキュメンテーション研究』 第30号
                                       (2022年5月刊) 定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号
                                       (2021年5月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
                                       (2020年5月刊)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号
                                       (2019年5月刊) 定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号
                                       (2018年3月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号
                                       (2017年3月刊)
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号
                                       (2016年3月刊) 定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号
                                       (2015年3月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号
                                       (2014年3月刊)
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号
                                       (2013年3月刊) 定価¥1,500 ¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 19 号
                                       (2012年3月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 18 号
                                       (2011年3月刊)
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号
                                       (2010年3月刊) 定価¥1,500 ¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 16 号
                                       (2009年3月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 15号
                                       (2008年3月刊)
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号
                                       (2007年3月刊) 定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 13 号
                                       (2006年3月刊)
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 12 号
                                       (2005年3月刊)
                                                  定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号
                                                   定価¥1,500 <del>¥3,000</del>+税
                                       (2004年3月刊)
<del>『アート・ドキュメンテーション研究』 第 10号</del> 品切
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号
                                                  定価¥1,250 <del>¥2,500</del>+税
                                       (2001年7月刊)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号
                                       (2000年7月刊) 定価¥1,250 <del>¥2,500</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 7号
                                       (1999年9月刊)
                                                  定価¥1,250 <del>¥2,500</del>+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号
                                       (1997年8月刊) 定価¥1,250 <del>¥2,500</del> (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号
                                       (1996年8月刊)
                                                  定価¥1,250 <del>¥2,500</del> (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第 4号
                                       (1995年8月刊)
                                                  定価¥1,250 <del>¥2,500</del> (税込)
<u> 『アート・ドキュメンテーション研究』 第 1~3号</u> 品切
<u> 『アート・アーカイヴ:多面体:その現状と未来:記録集』(2019年9月刊) 定価¥500(税込)</u>品切
<del>『日本のアート・ドキュメンテーション:20 年の達成:MLA 連携の現状、課題、そして将来:予稿集+資料編』</del>
                                     (2009年12月刊) 定価¥1,000十税 品切
<u>『国際シンポジウム:東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える:報告書』</u>
                                     (2005年1月刊)
```

定価¥1,000(税込)品切

『ars の現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG 叢書・2) (2000年3月刊) 定価¥1,000(税込)

『報告書:シンボジウム:フランスにおける美術情報の普及と専門教育』(1998年3月刊) 定価¥1,500+税

『美術情報と図書館:報告書』 (1995年3月刊) 定価¥2,500(税込)

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F

Tel: 03-6267-4550 Fax: 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法: https://maf.mynavi.jp/sales/



アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内

Japan Art Documentation Society

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として 創設され、1999年に日本学術会議の第 18 期登録学術研究団 体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名 に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会 (ARLIS/UK & Ireland)の Art Libraries Journal(2013, Vol. 38, No. 2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」 特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現 代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究していま す。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会 誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース 誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざ まな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行し ています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的 要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、 また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあ げています。

■活動内容

- 研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会と SIG の活動 現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。 また、日常活動の場として、会員の興味に応じて SIG (スペシャル・インタレスト・グループ) を結成することができます。現在、美術館図書室 SIG、デジタルアーカイブサロン SIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブ SIG)があり、自由に参加できます。 (地区部会・SIG 連絡先:

http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig)

- ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の 開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる 会員交流
- ・情報・資料の収集・交換・提供
- ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、 論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
- ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・ 維持(上記『研究』並びにHPで提供)
- ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・ 維持(HP で提供)
- ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
- ・IFLA (国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館 分科会の活動への参加・協力
- ・ARLIS/UK 等各国の同種組織との連携
- ・国際会議等参加支援のための助成金の支給

その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先 的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、 論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回) の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円 (ただし、65歳以上は4,000円[自己申告制])
- ・学生会員 4,000 円 (大学学部、大学院などに在学中の学生、申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体)一口以上 (一口 30,000円)
- · 団体購読会員 12,000 円

■ホームページ

・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。 http://www.jads.org/

■入会方法

・IP から「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご 記入の上、下記の問合せ先に郵送またはメール添付にて お送りください。役員会にて入会を承認された方に、初 年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は 会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード:

http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html)

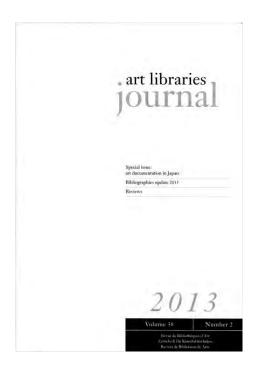
お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F (株) 毎日学術フォーラム内

Tel: 03-6267-4550 Fax: 03-6267-4555

E-mail: maf-jads@mynavi.jp



Art Libraries Journal (2013, Vol. 38, No. 2) 「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

2022年5月31日現在

アート・ドキュメンテーション学会

2022 年度 年次大会予稿集

発行日: 2022 年 6 月 11 日 (土)

編集: アート・ドキュメンテーション学会

発行: アート・ドキュメンテーション学会

http://www.jads.org/